

「若手研究者支援 1 次募集」国際学会発表	
A prospective study on the impact of Developmental Coordination Disorder traits on emotional/behavioral problems during the transition from preschool to school age	
氏名 藤澤 翠美花	所属 基幹研究院研究員
渡航期間 (実際の出発日～ 帰国日)	2026 年 7 月 23 日 ～ 2026 年 7 月 25 日
活動期間 (学会開催期間、 または実質的な現 地調査の期間)	2026 年 7 月 24 日 ～ 2026 年 7 月 26 日
学会名	16th International Conference on Developmental Coordination Disorder
場所	The University of Hong Kong (HKU)
発表者名、 発表形式	Sumika Fujisawa, ポスター発表

内容報告

1. 発表の概要

発達性協調運動症（以下 DCD）特性と行動上の問題に関する研究は一定数存在するものの、就学前から小学校入学後にかけて前方視的に追跡した研究は限られており、就学移行期における発達の变化を縦断的に捉えた知見は十分に蓄積されていない。そこで本研究では、年長児（Time 1）から小学校 1 年生（Time 2）への移行期に着目し、DCD 特性がその後の情緒・行動の問題にどのような影響を及ぼすのかを探索的に明らかにすることを目的とした。Y 市の就学時健康診断を受診した子どもの保護者を対象に質問紙調査を実施し、両時点で回答が得られた 151 名を分析対象とした。交差遅延効果モデルによる分析の結果、就学前の DCD 特性は就学後の「行為の問題」を予測し、また就学前の「仲間関係の問題」は就学後の DCD 特性の高さを予測することが示された。さらに「行為の問題」の下位項目を詳細に検討したところ、DCD 特性は「かんしゃくを起こしやすい」「他児とのけんか・いじめが多い」といった行動の出現を予測していた。これらの結果は、協調運動の困難さが就学移行期において行動面の問題として表出しやすい可能性を示すものであり、教育現場や家庭で DCD 特性への理解が十分でない場合、子どもの行動が誤解され、過度な叱責につながることでさらなる問題を招くリスクがあることを示唆する。以上の点について、最新の知見および国際的な視点からの示唆を得るため、国際学会においてポスター発表を行った。

2. 学会参加により得られた成果

学会参加を通じて、国外研究者との議論から、国際的にも DCD 研究は発展途上であり、日本から知見を発信する意義を再確認した。海外では幼児期から青年期を中心とした研究が多く、成人期への拡張が今後の課題として共有されていた。この動向は日本でも同様であり、成人期まで対象を広げた研究蓄積の必要性を認識する機会となった。また、国際的な議論を通じて、就学移行期の縦断研究が持つ価値が強調され、早期発見と支援の重要性を示す本研究の意義が評価された。

3. 今後の展望

今後は、学会で得られた示唆を踏まえ、本研究成果を海外学術誌へ投稿する準備を進めている。また、本研究で得られた知見をさらに発展させるべく、就学移行期以降の追跡や成人期まで視野を広げた研究を推進し、DCD 特性に起因する困難の理解と支援の枠組みをより精緻化していく予定である。

ふじさわ すみか／お茶の水女子大学 基幹研究院 研究員

- ・ 英文タイトル A prospective study on the impact of Developmental Coordination Disorder traits on emotional/behavioral problems during the transition from preschool to school age
- ・ 英文氏名 Sumika Fujisawa
- ・ 英文発表者名 Sumika Fujisawa ・ Aya Saito ・ Masumi Sugawara ・ Akio Nakai